

西洋古版本印刷地の見分け方ガイド（2）

武者小路 信和
(大東文化大学文学部)

前回紹介した Sayce による植字・組版上の慣行に基づく印刷地・出版年の見分け方は、海賊版などのような正しい出版事項を匿した本の実際の印刷地・出版年を推定する手がかりの一つとして、記述書誌の編纂や出版史研究などで広く利用されてきました¹⁾。今回は、17 世紀イタリアのナポリの書物を対象に Sayce の方法を検証した C. Dumontet の論文と、Sayce が取り上げなかった本文（テキスト）部分の植字慣行に注目して印刷地の推定を行う C.J. Mitchell の方法と R.A. Leigh の方法を紹介します。

Sayce は、1530-1800 年の間にヨーロッパで出版された 2800 冊以上の書物を調査しましたが、国別のサンプル数で見ると、多い国でフランス 932 冊、オランダ 667 冊、イギリス・アイルランド 377 冊、サンプル数の少ない国だとベルギー 90 冊、スペイン・ポルトガル 41 冊、デンマーク・スウェーデン 15 冊に過ぎません。できるかぎり正確に国・地域別の特徴や時期的な変化・動向を捉えるためには、必ずしもこのサンプル数では十分でなく、もっと数を増やす必要があるでしょう。Sayce 自身もサンプル不足を自覚しており、後続の人たちが各国・地域を対象にした補充調査を行うことによって彼の鑑定方法が改訂されていくことを期待していましたが、残念ながらそのような研究はほとんど現れていません。その数少ない研究の一つとして、17 世紀イタリアのナポリを対象にした C. Dumontet 論文²⁾があります。

Dumontet は、Sayce の鑑定方法の信頼性を検証し、また特定地域

に限定して詳細に調査することによる新しい知見の入手を目的に、17世紀ナポリで出版された図書414点の調査を行いました。その結果、Sayceの鑑定方法は基本的に信頼できるものであるが、Sayceがイタリアの慣行として指摘した特徴とはやや異なるナポリの地域的な慣行が見つかっており、Sayceの鑑定方法を利用する時には注意する必要があることを明らかにしました。

Sayceによる「イタリア」の一般的特徴と17世紀のナポリの特徴との主な相違点としては、以下の点が指摘されている。

- ・ Sayceは、イタリアにおいてアラビア数字の出版年表記は常に使用されるものの、ローマ数字の出版年表記に比べるとかなり少ないとしているが、ナポリではローマ数字表記とアラビア数字表記との割合は6対4程度である。
- ・ Sayceは、イタリアにおけるローマ数字の出版年表記の仕方として、区切りを入れない「MDCLII」の形が非常に一般的であるとし、千と百の桁をドットで区切る「M.DC.LII」の形は決して稀とはいえないが前者の方が支配的であるとしている。しかしナポリでは、逆にドットで区切る形(61%)の方が区切りを入れない形(32%)よりも多かった。
- ・ ローマ数字の変形で出版年を表記する形のうち「I」が飛び出していない形「(CI)II」に関して、Sayceはほかの国・地域に比べイタリアにおいて(「MDLII」形が一番支配的であるが)最も頻繁に用いられるとしているが、ナポリでは約5%と少なかった。
- ・ 前付部分の折記号に関して、Sayceはイタリアでパラグラフ(¶)を用いている例がなかったとして、これが用いられていた場合イタリアで印刷されたのではないことの根拠となりうる可能性を指摘しているが、ナポリでは6例(1.8%)で使用されていた。
- ・ 本文部分の折記号「Sf(長いs)とSs」と「VuとVv」に関して、Sayceはイタリアにおいては時期的な展開が明確で17世紀末までは「Sf」と「Vu」が支配的で、それ以降は「Ss」と「Vv」が支配的となったと指摘している。しかしナポリでは「Ss」と「Vv」が1660年代からかなり使用されるようになり、とくに「Ss」は1670年代以降その割合は50%を超えていた。

Dumontet の調査は、Sayce がイタリアの植字・組版慣行の特徴と指摘している事柄が基本的に信頼できるものであることを確認したという点で評価できるし、また少なくとも 17 世紀ナポリに限定した場合、出版年のローマ字表記の仕方の食い違いや前付部分の折記号におけるパラグラフ使用例が（数が非常に少ないとはいえ）存在したことの指摘は有用な情報といえるでしょう。しかし分析の対象がナポリという地方都市の出版物に限定されているために、ナポリの植字・組版慣行がイタリア諸都市の慣行と一致しているのか否か、またイタリア全体の出版物のなかでナポリの出版物が占める割合などが明らかにされない限り、Dumontet の調査結果を Sayce の方法に組み込むことは難しいように思われます。

Sayce が識別の手がかりとして利用したのは、本文部分の植字慣行ではなく出版年、折記号やキーワードなど、本文をとりまく部分でした。本文部分の植字、つまり文章を活字で組んでいく際に、国・地域別の特徴が現れないのでしょうか。そのようなことはありません。18 世紀の書物の場合、C.J. Mitchell は引用符 (quotation marks) の付け方に、そして R.A. Leigh は paragraph capitalisation の使用に、国・地域別の特徴が現れることを明らかにしています。

Mitchell³⁾ は、これまで取り上げられることのなかった引用符に注目し、British Library の *General Catalogue* から無作為抽出した 18 世紀ヨーロッパで出版された書物 513 点のなかから、引用符が使用されていた 251 点を対象に分析を行いました。18 世紀に限定した理由として、この調査が *Eighteenth Century Short-Title Catalogue* の編纂との関連で行われたことと共に、ヨーロッパにおいて 18 世紀初頭までは引用符の付け方に変化がないため見分けがつかないこと、また 18 世紀末からは現在と全く変わらない引用符の付け方が現れ始めたことを挙げています。

現在の引用符の付け方は、記号の形はともかく、引用する文章の出だしの部分 (opening) と終結部分 (closing) の 2 箇所引用符を入れます [以下、前者を「始めの引用符」、後者を「終わりの引用符」と表記します]。しかし 18 世紀の書物には、第 1 図にみられるように、始めの引用符と

終わりの引用符、それに引用文が数行に渡るときに各行の先頭部分 (marginal) に入れられる引用符 [以下、「行頭の引用符」と表記します] の 3 種類が使用されていました。

Mitchell は、18 世紀の書物に使われているこれら 3 種類の引用符がそれぞれどちらの方向に向いた付き方をされているか、その組み合わせに注目することによって、以下のような国・地域別の特徴があることを指摘しています。

- ・ フランスでは、引用符の形 (コンマ、ギュメなど) がなんであれ、終わりの引用符 (付いている場合) と行頭の引用符とが共通している (同じ方向を向いている) のに対し、始めの引用符は逆の方向を向いている。
- ・ フランス以外の国々では、引用符の形 (コンマ、ギュメなど) がなんであれ、始めの引用符と行頭の引用符とが共通している (同じ方向を向いている) のに対し、終わりの引用符 (付いている場合) は逆の方向を向いている。

なお、始めの引用符と行頭の引用符とがインバーテッドコンマ (「'」 「'」: 倒立したコンマ *inverted comma*) で、終わりの引用符が肩上の高さの倒立していないコンマ (「'」 「'」: *elevated non-inverted comma*) である場合は、英語圏の特徴である (コンマがシングル (「'」 「'」) でもダブル (「"」 「"」) でも⁴⁾)。

- ・ フランスとイギリスとで対比した場合、終わりの引用符が付けられていない書物、とくに 18 世紀末の書物でそうならば、フランスで印刷されたものであることを示唆している⁵⁾。

行頭の引用符が無い場合、イギリスで印刷されたものであることを示唆している⁶⁾。

J.-J. Rousseau の研究者・書誌学者である Leigh⁷⁾ は、長年 18 世紀のフランスを中心にヨーロッパの書物に触れてきた経験から、本文部分の植字慣行の中の *paragraph capitalisation* が印刷地の推定の手がかりになることに気づきました。第 2 図にみられるように、これは各段落の出だしの語あるいは数語を大文字だけで組むことを意味しています⁸⁾。

Leigh は、paragraph capitalisation について組織的な調査を行ったわけではないために、国・地域別の特徴を明確化することはできませんでしたが、フランスのパリで印刷された書物には、どの種類であれ paragraph capitalisation を見つけることは極めて困難である、つまり例外はあるものの、paragraph capitalisation が行われている書物はパリで印刷されたものではないと一応判断できるとしています。ただし、paragraph capitalisation が行われていないからといってパリで印刷されたと判断することはできないことに注意する必要があります。

引用符の付け方も paragraph capitalisation も、それ単独では印刷地を推定するための手がかりとしては十分な決め手とはなりません。Sayce の方法と組み合わせることによって、威力を発揮するでしょう。ぜひ身近にある西洋古版本を対象に試してみてください。

(つづく)

【注】

- 1) たとえば Smith, D.W. "Preliminary bibliographical list of editions of Helvetius's works." *Australian Journal of French Studies*. 7(3):299-347(1970) 参照。
- 2) Dumontet, Carlo. "Compositorial practices in seventeenth-century Naples." *Papers of the Bibliographical Society of America*. 98(2):149-161(2004)
- 3) Mitchell, C.J. "Quotation marks, national compositorial habits and false imprints." *Library*. 6th ser. 5(4):359-384(1983.12)
- 4) シングルの引用符の使用は英語圏の特徴であるとされる。
- 5) イギリスでは 18 世紀の最初の 30 年間で始めの引用符と終わりの引用符とがほぼ必ず付けられるようになったが、ヨーロッパ大陸では始めの引用符が付いていても、終わりの引用符が付けられていないことはよくあるという。その点を考慮すると、「終わりの引用符がない場合、英語圏で印刷されたものではないことを強く示唆している」という Mitchell による別の表現の方が適切のように思われる。
- 6) 行頭の引用符は 18 世紀末には徐々に消え始めたが、とくにイギリスではそれよりも早く使用しなくなっていったという。
- 7) Leigh, R.A. *Unsolved problems in the bibliography of J.-J. Rousseau*. Edited by J.T.A. Leigh. Cambridge: Cambridge University Press, 1990. p.25-50.
- 8) Leigh は、paragraph capitalisation を以下の 3 種類に分けている。

- ① full paragraph capitalisation : 最初の語が2字からなる語である場合に次の語を大文字化したり (例 : ON DIT que)、疑問文のように語をハイフンで繋いでいる場合1語扱いして大文字化する (例 : POURROIT-ON)。
- ② biliteral capitalisation : 2字からなる語を含め、最初の語のみを大文字化する (例 : IL est)
- ③ monoliteral capitalisation : 例え1字からなる語であろうと、最初の語のみを大文字化する (例 : A dire vrai)。

18世紀のヨーロッパで出版された本には、paragraph capitalisation が行われていない書物も数多くあります。そのような書物でも、一番最初の文章の出だしの語 (あるいは数語) を大文字だけで組んでいる本をよく見かけますが、これはあくまでも一番最初の文章の出だしだけに限られ、段落毎に繰り返される訳ではないので、paragraph capitalisation ではありません。

PROFICIAT, f. m. (*ancien terme d'Imprimeur.*)
 mot latin usité autrefois par les compagnons & ap-
 prentis Imprimeurs pour signifier *seftin*. L'édit de
 Charles IX. en Mai 1571, *art. v.* porte: «les com-
 pagnons & apprentis Imprimeurs ne feront aucun
 » banquet qu'ils appellent *proficiat*, foit pour entrée,
 » ifsue d'apprentiffage, ne autrement pour raifon du-
 » dit état ». (*D. J.*)

(上) デイドロ『百科全書』(Paris, 1751-72)

(下) A・スミス『国富論』(London, 1776)

dian was originally sent out to purchase them. Mr. Mun compares this operation of foreign trade to the seed time and harvest of agriculture. "If we only behold," says he, "the actions of the husbandman in the seed time when he casteth away much good corn into the ground, we shall account him rather a madman than a husbandman. But when we consider his labours in the harvest, which is the end of his endeavours, we shall find the worth and plentiful increase of his actions."

第1図: 18世紀の書物にみられる3種類の引用符

THE WEALTH OF NATIONS. 29
 EXCEPT ONLY, refrains upon the importation of goods of almost C H A P.
 all kinds from those particular countries with which the balance of
 trade was supposed to be disadvantageous.

These different restraints consisted sometimes in high duties, and
 sometimes in absolute prohibitions.

EXPORTATION was encouraged sometimes by drawbacks, some-
 times by bounties, sometimes by advantageous treaties of com-
 merce with foreign states, and sometimes by the establishment of
 colonies in distant countries.

DRAWBACKS were given upon two different occasions. When
 the home-manufactures were subject to any duty or excise, either
 the whole or a part of it was frequently drawn back upon their
 exportation; and when foreign goods liable to a duty were im-
 ported, in order to be exported again, either the whole or a
 part of this duty was sometimes given back upon such expo-
 sation.

BOUNTIES were given for the encouragement either of some
 beginning manufactures, or of such sorts of industry of other kinds
 as were supposed to deserve particular favour.

By advantageous treaties of commerce, particular privileges were
 procured in some foreign state for the goods and merchandises
 of the country, beyond what were granted to those of other
 countries.

In the establishment of colonies in distant countries, not only
 particular privileges, but a monopoly was frequently procured
 for

(左) A・スミス『国富論』(London, 1776): 有り

laisser écouler l'eau superflue hors de la fontaine, qui
 ne doit être pleine que jusqu'au niveau de la retraite
 qui distingue les deux cavités.

Le jeu de cette machine est aisé à entendre: l'eau
 étant lâchée sur la roue, les leviers de son arbre ren-
 trent en tournant les queues des maillets, les élè-
 vent jusqu'à ce que venant à échapper, les maillets
 retombent par leur propre pesanteur sur le chiffon
 qui est dans la pile; le chiffon ainsi trituré pendant
 une heure ou deux, & dépuré de ses crasses par l'eau
 continuellement renouvelée des fontaines, laquelle
 remplit la pile, & fort en traversant le kas, devient
 enfin la matière dont on forme le papier.

Un moulin à ordinairement quatre piles, dont
 une sert pour effilocher le chiffon; deux autres pour
 affiner, & le quatrième dont les maillets ne font point
 ferrés, ni la pile garnie de platine pour détremper la
 matière quand on la retire des caisses de dépôt où on
 la fait passer en fortant des piles à affiner pour y re-
 ter jusqu'à ce qu'elle passe dans la cuve à ouvrir.

Il y a un art à bien disposer les levées sur l'arbre,
 en sorte que la roue soit chargée le moins qu'il est
 possible à-la-fois; il faut que les maillets levent les
 uns après les autres pour cela: si l'arbre est destiné à
 un moulin à quatre piles, comme celui dont nous

(右) デイドロ『百科全書』(Paris, 1751-72): 無し

第2図: Paragraph Capitalisation の有・無し